

<座談会の記録>共同研究をめぐって：今日までそして明日から

著者	INAGA Shigemi, 井上 章一, 笠谷 和比古, 倉本 一宏, 鈴木 貞美, 戸部 良一, 早川 聞多, リュッターマン マルクス
雑誌名	日文研
巻	49
ページ	59-113
発行年	2012-09-28
特集号タイトル	創立二十五周年記念特別号
URL	http://doi.org/10.15055/00004148

共同研究をめぐって—今日までそして明日から

二〇二一年三月一七日

パネリスト

稲賀 繁美

井上 章一

笠谷和比古

鈴木 貞美

戸部 良一

早川 聞多

マルクス・リュッターマン

司会

倉本 一宏

倉本 二回目の座談会は「共同研究をめぐって—今日までそして明日から」でございます。

私のほうには、これまですべての共同研究の記録と原稿を少しいただいております。特に始まった頃の共同研究についてご存じない方も多いと思いますし、私もその頃まだ学生でしたので、どんな感じだったのかなというので見てみました。

一九八七年に創設されまして、この原稿によりますと、その頃早々五班のプロジェクトが始

動したとあります。調べてみますと、その五班というのは、まず九月に「日本文学と『私』」、これは代表者が中西先生で、幹事が上垣外助教授。十一月に二ヶ月遅れまして「世界における日本研究の知識社会学的研究」、代表者が梅原先生で、幹事が園田助教授。同じ十一月に「日本文化の基本構造とその自然的背景」、代表者が埴原先生で、幹事が白幡助教授ということです。

年が変わって八八年になりまして、一月に『場』の日本文化、代表者が村井康彦先生で、幹事が井上先生。同じ一月に「江戸時代の芸術における外国文化（中国を中心として）の受容と変容」、これは代表者がドナルド・キーン先生、杉本先生で、早川先生が幹事ということです。

それぞれ最初の中西さんのものから、小松、早川、光田先生が班員。梅原さんのところは、井上、笠谷、白幡、鈴木、早川、安田。安田先生も助教授と書いてあります。埴原先生のところは、鈴木、早川。村井先生のところは、笠谷、白幡、早川。キーン先生のところは、白幡、鈴木ということでございます。

これを見ますと、始まったのは九月一日。洛西ニュータウン内センタービル五階の仮住まい事務所。どこにあるのか、私は全然わからないのですが、そこで行われたということでございます。

その他、共同研究の理念がいっぱい書いてありますが、この原稿によりますと、第一期と第二期に分けてありまして、第一期は一九八七〜一九九六の一〇年間、この時期は日本文化研究のスターが集結している。スターによって行われたのが一〇年間ということ。しかも最初の一〇年間に関しましてはものすごく褒めていまして、「日本文化を真正面に見せたスケール

の大きな正統派モデル」とか、「大きな意気込みが感じられた」とか、「ものすごく成果が上がった」とあります。

それでは、特に最近の先生方、初期の頃の共同研究はどうやって始まったのか、どういう状況だったのかという知識がありませんので、今、前に並んでいらっしやる先生方の中で、初期にご参加されました鈴木先生とか、笠谷先生とか、井上先生、早川先生など順番同でございますが、まずは昔の話を思い出して、一言ずつお願いしたいと思います。

じゃあ、鈴木先生から。一番最初の九月一日の幹事です。

白幡 一番最初にやったのは、たぶん、井上さんや。

倉本 いやいや、初期の五本で幹事をやったのは、十一月スタートが白幡先生で、一月スタートが井上先生です。

白幡 一番早いのは、幹事が上垣外さん。

倉本 そうです。その次が白幡先生。

白幡 ざっとだけ言います。中西先生の「日本文学と『私』」でしたか、それはもう早くから、準備室の段階からやるということが決まっています、そして上垣外さんが準備室にいたものから、それで幹事役に。だけど、研究会のアイデアはきつと中西先生が中心で、たぶん上垣外さんのほうが幹事役を申し出たんじゃないかと思うんです。

それから、私がやったのは十一月からということですが、埴原先生は最初の調整主幹で、そのときの調整主幹は一人でした。で、埴原先生は日本人はどこから来たかという研究をされています、梅原先生がそのテーマに強い関心を持っていて、埴原先生のところから自然人類学の最新の成果はどうなっているかということ聞きに行かれたんです。埴原先生の方がさらに日

本人の起源論を深めて考えたいと思っていたか、あるいは梅原さんの質問がなかなか重たいものだったのか、それに答えるために「そうしたら、君、来てくれ」ということで、梅原説によれば、埴原先生に「ぜひ、新設の研究所に来てくれ」ということで、そのテーマも含めて呼ばれたということです。

私が幹事になったのは、そのとき実は私と井上さんは、これでも自然系ということに、自然・人文・社会の中の自然系ということになっていまして、日文研は人文系だけの研究所ではない、自然系のスタッフもおるというわけで私が埴原先生の共同研究会の幹事をやることになりました。メンバーを決めたのは、当然埴原先生の方で、幹事の私は会のお膳立てをやりました。そして、安田さんは、創設二年目に来られたのかな。

鈴木　そうです。

白幡　その後に交代したんです。

倉本　わかりました。

白幡　その次は、だから、一つの研究会の幹事をずっと最後までやられたのは井上さんじゃないかな。翌年、村井先生の研究会。

倉本　そうですね。それは翌年一月スタートですね。

白幡　その当時、我々の発想としては、教授が主宰し助教が幹事になる、そして異分野で組む。まあ、絶対に異分野だけというわけでもないけれど、組み合わせの妙に期待する。妙というのはいろんな意味がありますから。たえなる場合もあるし、みょうな場合もあるし。そういう感じで、助教の仲間うちでこれは譲り合ったというか、押し付け合ったのか、忘れませんでしたけれども、それぞれ幹事を一つはやるとういうことで分担してやったような気がします。

後は井上さんに話を聞いてもらいましょう。

倉本 その前に、九月にスタートした中西先生の研究会に班員として出られていらっしやったのが、大阪大学助教授の小松先生と、今いらっしやる方は本センター助教授の早川先生と、武庫川女子大学講師の光田先生なんです。その頃の話、じゃあ、早川先生、思い出していただいて。中西班です。

早川 そのころは今言われた五本ですから、助教授はほとんどすべてに顔を出していたように思います。まさに学際的と言ったら変ですけども、幹事でなくても多くの所員が顔を出していました。

中西先生のところは、もうそれこそお歴々が毎回のように見えて、お話が伺えるので、そういう雰囲気はじめてだった僕なんかは、ほんとにそれはもう刺激的だったですけども。

中西先生が非常に主導的に進めておられて、最後の成果のところまでつながっていったと思います。

倉本 発表されたのは覚えていますか。

早川 覚えてないですよ。何を話したかわからない。

倉本 一九八九年四月三日に「絵画表現と私」というのを。

早川 ただ一つよく覚えていることは、実は各共同研究が終わった後の夕方からの懇親会です。僕はそっちの方に力をそいで、毎回シーズンに合わせて、またそれぞれの先生の趣向とかに合わせて、ホテルのシーズンだったら清滝へ行こうとか、アユの時期には清滝の落合に食べに行くとか、モミジのときにはそれこそ小倉山、藤原定家の庵跡、厭離庵を貸し切ろうとか、そういうことをやるのが僕は楽しかった思い出が多いんですけども。そのときに、飲み

ながらいろんな話を聞くことが多かった思い出は強いですが、どれもね。

倉本 確かに早川先生は五つの研究会すべてに関与されていて、白幡先生も四つに関与されておられます。井上先生は村井先生の幹事と梅原先生の班員ということですが、その頃のお話を伺えますでしょうか。

井上 さっき白幡さんがおっしゃったことやけれども、日文研はいろんな学問の分野を超えるということをしていました。私は工学部を出ていたし、白幡さんは農学部を出ていました。それで、理科系の若い人がいるというのは一つの売り物になったのです。売り物に、実態としてなったかどうかはともかく。

倉本 理科系の若い人というのは、お二人。

井上 そうです。今や理系としては、見るかげもないほど落ちぶれていると思いますが、私たち二人は理科系をここでは代表していたのです。信じられへんね。思えば遠くへ来たもんや。

私は村井康彦先生の共同研究班の幹事になりました。残念ながら、その共同研究班ではきちんとした報告書が出せませんでした。幹事の手際も悪かったんだと思いますが、みんなの興味があまりにばらばらだったこともあるような気がします。

私はそれ以前から京都大学人文科学研究所で共同研究という仕組みには慣れていました。あそこは旅費は出せないのですが、ほぼ毎週、あるいは期間を空く班でも二週間おきぐらいにやっています。ここは二ヶ月おきぐらいですね、旅費を出すという都合もありますから。その意味で、一つ一つの班の凝集力は人文研の共同研究班のほうが強かったと思います。

とりわけ、今、振り返って、桑原武夫が主催した——前も桑原さんの話しましたね、ここで。

倉本 今日もどうぞ、ひとつ。

井上 私の中で桑原武夫が大きいテーマになっているような気がします。

桑原さんの共同研究には、共同執筆論文がけっこうありました。例えば鶴見俊輔と多田道太郎の共同執筆論文とか、山田稔と多田道太郎の共同執筆論文などです。あるいは中井正一の『委員会の論理』めいたところざしもあったのかなあ。とにかく桑原さんの圧倒的な指導力で「君はこれを書きたまえ。このテーマについては君と君が共同で書きたまえ」というような、そういうタイプの強い凝集性のある研究会だったと思います。

桑原さんは民博ができたときに、民博に招かれて演説をされました。「私は共同研究の主宰者になるときは、あえてスターリンになった。その覚悟がなければ共同研究などはできません」と言い切られました。なぜ桑原武夫にそれが可能やったかについては、私にいろんな考えがあります。でも、きょうはその場ではないと思いますので控えます。ただ、本当にあの人はすごい指導者だったんだなと思います。

日文研でそういうタイプの主宰者はいなかったと思います。私が最初に幹事になったところも、みんな発表はばらばらでしたね。村井さんは、班員にテーマをあたえるような班長じゃあなかった。でも、おかげで私はおもしろい勉強ができました。例えばあるテーマが議題になったとします。人類学の方がある方向の議論をします。そうすると、地理学の方が「いや、地理学ではそんなふうに考えません」と答える。考古の人は「いや、考古ではそんなふうに受け取りません」と言う。私は、埴原さんの共同研究会も含めてですが、こんな印象を持ちました。真理とされることは学界によって違うのだと。じゃあ、そのこと自体が研究テーマになるなあと。学界によって真理がねじ曲げられる、その曲げ具合を研究するという研究が可能になる

だろろというふうに、いずれそういう研究会を自分で持ちたいと思いますが、そのことを教えてくれたのは初期のやや拡散的な共同研究だったと思います。その意味では感謝もしますね。

ついでに、これも印象深かったんだけど、村井先生の共同研究班でアジールをめぐるシンポジウムを行ったことがあります。そして当時、一番ときめいていらっしやった頃の網野善彦さんをお招きしたことがあります。

倉本 それは八〇何年ですか。

井上 何年かなあ。

研究会自体は滞りなくというか、滞りなく終わるものなんですけど、終わりました。あとの懇親会では村井康彦さんと網野善彦さんが語り合われているのを横で聞いていました。網野さんが、ややからかいぎみに「村井さんはやっぱり京都のお公家さんだね」というふうに、言わはるんですよ。それに対して、村井さんが「関東の人にはわかってもらえないな」とやりかえすわけです。このやりとりを見て、私は思いました。学問分野によって真理が違うだけではない。出身大学によっても真理は違うんだ、と。このことをリアリティーをもって教わったのは、村井さんのあの研究会だったと思います。いずれこのことも共同研究のテーマにしてみたいと思っています。

やや拡散的だったという印象は残るのですが、それを私は悪く受け取っていません。自分の肥やしになっていると思うっております。

倉本 ありがとうございます。

最初の中西先生の研究会には、当時、大阪大学助教授でした小松先生が参加されています

が、その当時は外部からごらんになって、共同研究にどういふ感じをお持ちだったのでしょうか。

小松 私は、着任まで日文研の先生方とはほとんど会ったことがないんですね。おそらく井上さんとも日文研の共同研究会ができるまで、ほとんどお付き合いがなかったんですね。ただ、梅原さんとはこの研究所ができる前に二度ほど、ちょっとお会いしたことがありました。たとえば鬼をテーマにしたテレビ番組で一緒になったことがありました。

研究所ができて、そのときに中西先生から誘われて、「日本文学と『私』』というのがあるので、おまえも入れと言われて入りました。あの頃の中西先生は、非常に意欲的だったと思うんですね。共同研究会のメンバーもたくさんいたんじゃないかと思えます。

ただし、私がそれほど熱心な参加者だったとは記憶しておりません。私が何を発表したかも記憶していません。ただ、一度、その後「日本の想像力」という後続の共同研究会を中西さんが組織していて、それにも入れてもらったんですが、順番が来たからしゃべれと言われてしゃべったうちの一つが、たしか宮田登批判を延々とやっていたのです。よく覚えていなくてすけれども、そのときに隣にいたのが京大のフランス文学の稲垣さんで、「あなた、変な人ですね。人の批判を共同研究のテーマにするというのは」と言っていて、随分不思議がられた記憶があります。それほど好き勝手なことを言える会だったような気がいたします。

それともう一つは、井上さんも言っていたように、いろんな人と出会う機会をつくってもらったということですね。その頃の光田さんは武庫川女子大にいて、大変にやる気満々の、何というんでしょうか、いろんなことを僕にも教えてくれましたし、今こんなことをやっているんですとか、書いたものを送ってもらったりして、将来中世文学研究の中心的人物になるん

だなあと印象を持っておりました。ですから、僕よりも先に日文研に着任したのを見て、当然だよなという印象を持っております。

上垣外さんも印象に残った方で、その頃知り合った何人かの人たちとは、学歴だとか、あるいは東や西やとか、あまり気にせずいろいろな人と興味のある話を話し合っていました。それから、早川さんと同じで、終わった後の飲み会が非常に楽しくて、今回はどこに行くんだろう、次回はどこで食べられるんだろうとか、そういうふうなことで京都の食べ歩き的な会でもあったというふうに思っております。洛西のセンタービルの何階かで研究会をやっていたんですけれども、その頃の印象としてはそのようなところしか覚えておりません。

実は私は日文研の客員助教授もやっていますよね。誰も覚えていないんじゃないかな。半年だけやっております。というのは、その後、歴博の客員も頼まれ、それでどっちかを選ばなければいけないというので、こっちのほうをお断りして、向こうのほうの客員をすることにしました。そんなこともありまして、歴博と日文研とはどっちがおもしろいかなとか、あるいは民博と日文研の共同研究は、どちらが面白いかなというも思っていました。

その中で私が判断したのは、日文研というものが、後発部隊だったということもあるのかも知れませんが、非常に多彩ないろいろな人たちが、しかも私から見れば、既にマスコミや学界で活躍をしているような人たちがたくさん集まっていたということもあって、大変に魅力的だったなあというぐらいの印象です。

ただ、そんなに熱心な共同研究員ではなかったと思います。それは、ちょうどその頃から大学が再編の時期に入って、教養部をどういうふうに組み立て直すかとか、学内的には重点化とか、いろいろ本務校のほうが忙しくなったということも関係していることもあるかもしれません。

その頃の印象としては、私はあまり、ほんとにしゃべっていたのか、何回行ったのかも記憶にないぐらいです。

倉本 ありがとうございます。光田先生のお話が出ましたが、小松先生の最初の発表は一九八八年一月一日、「悪霊払いの儀礼、悪霊の物語」でして、奇しくもその日一緒に発表されたのが光田先生だったんですね。そのときの印象がかなり強かったんだろうと思います。

それでは、初期の頃の共同研究に多く参加しておられました筈谷先生に昔の話をお願いいたします。

筈谷 記憶が定かではないので。

倉本 梅原先生の班員と。

筈谷 何に入っていますかね。

倉本 梅原先生、村井先生、最初の頃。あと、濱口先生、飯田先生、山田慶兒先生、村上先生、速水先生と、いっぱい入っていらっしやいます。

筈谷 入っていますね。最初、物珍しいので、とにもかくにも入りまして。私、一番近いのはやっぱり村井先生なので、行って、井上さんが幹事をやっていたけれども、確かにかなり変わった研究会でしたよ。幹事さんも相当変わった人で、美人論の人というのは聞いていましたが、美的価値とかいろんなものを数量化しなきゃいかんというんですね。これは私は非常にショックで、つまり美とか、それは質的な問題。すべての問題はお金であれ何であれ、数量化しなきゃいかんということをとどうとやってはりまして、いや、これはすごい人がいるなと思って、えらい感心したものでしたね。村井先生はお殿様然として「よきにはからえ」という

感じて。それと奇妙な幹事さんの何とも言えないほんわかした研究会でした。

私は歴史学出身でして、大学の歴史学というのははつきり言って非常に固いわけですよ。余計なことが言えない。手を出さないといいますが、危ない話は大体手を出さない。つまり要するに、史料実証主義ですからね。確実に根拠のある話以外は一切しないというのが実証主義歴史学の根本原則ですが、ここへ来ますとそういう話は言っていないでも、そもそも世界が違うという感じで。ただ、混乱させられるといいますが、逆に言うと、だいぶ違う、けったいな世界だなと思いつながら、ならばというわけで、とにかくあれもこれも、とにかくメニニューを全部食べてやれと。日文研にそろっている、出ているメニニューは片っ端から食べてやれというわけで、いろんなやつに出まして。それはやっぱり我々にとつての血となり肉となり、本来の歴史学界だけでは済まない広がりというものをもたらしてくれたというふうに思います。

反面、私の向かいの逆に、史料実証主義という観点からすると、ややちょっと空中戦的な議論があるのではないかなというところもあって、それはこちらとしてのまたプレシップルを出させてもらいました。私としましては、得るところは甚だ大きかったですね。

私の中で、その研究の中でも一つ印象に残っているのは村上泰亮先生ですね。この村上先生、経済学者ですけども、その議論はほとんど哲学なんです。経済学の研究会のはずなのに現象学的であるし、超越論的何とかという議論をやっていましたね。そもそも、それを言われるんですけど、覚えてはります？

そのとき私は実は、猪木所長と一緒になんです、所長は私が同じ班員にいるということを全然覚えてくれていないんですよ。私はちゃんと覚えてはいるんですね。高名な猪木武徳先生だと思っていた。私がいることは「えっ、いましたか」というひどい話で、全然眼中になかったん

ですが。

私の立場から言いますと、村上先生という『文明としてのイエ社会』という名著があるのです。これは佐藤誠三郎さん、公文俊平さん、村上泰亮さんの三教授による歴史的名著であります。これが実に日本の家社会論というのを中世の在地領主制、そこから説き起こして延々と論じる、それこそ非常に壮大な枠組みです。単に日本史だけではなくて世界史の観点から、そして日本の中世在地領主制の中で家というものができて、それがどのように展開して、そして今日のいわゆる日本型組織、日本型経営論にどういうふうに関与しているかということ論じた壮大な本であって、私も実はここへ来る前にその本を読んで、えらい感化を受けました。そうしたら、この日文研の中に、その中の一人の村上先生がおられるというわけだから、これはもう喜び勇んで行きました。

光栄にも、村上先生は実は私の『主君「押込」の構造』という、かなり発想法として似た議論ですが、そのことを実は知ってくださっていきまして、私としては非常に感激をしまして、それで村上先生のところの研究会に入れさせていただきましたけれども、先ほど言ったとおり、非常に経済学的であるよりもむしろ哲学的、現象論的世界というわけで、いや、すごい議論をするもんだなというので、その思索の深さと世界観の大きさ、見方の広さといいたいしょうか、そういうことを広く感化させられたことを覚えていきます。

そして、私が後から幹事を務めることになりましたが、山田慶兒先生の「東アジアの本草と博物学の世界」、これは後から話したほうがいいのでしょうか。

倉本 いや、どうぞ、続けてください。

笠谷 それは私が本格的に幹事を始める分だけでも、それ以前にいろんなメニューを見て、

大いに感化され刺激され、そして、今までの歴史学界だけの議論ではここでは通用せんのだと。要するに、別の形で理論武装してやらなければ、ある意味、鳴門の渦潮に巻き込まれてしまうのではないかという思いを深くしたというのが、当初来たときの印象と感想であったということにしましょうか。

私ちょっと先に、「東アジアの本草と博物学の世界」のほうが最初のやつなので、そっちをお話ししましょうか。

私が最初に幹事を本格的に務めるようになったのは山田慶兒先生の「東アジアの本草と博物学の世界」です。歴史学の私がなぜその世界になるかということは、最初わからなかったけど、それは白幡さんが説明をしてくれて、実は私は吉宗の享保改革をやっているのですが、吉宗の享保改革の中にその芽があるんです。私の論文にもなりますが、薬の国産化という問題から蘭学に展開するという吉宗の政策の中に大きな筋があって、その辺をやればいいんだと白幡さんから言われて、ああそうか、そういう観点でそれに取り組めばいいのかということがわかって、幹事を引き受けて、入りました。

ここもやっぱり多士済々といえますか、山田慶兒先生は非常に厳しい学者でありまして、この議論はその方面で非常にしっかりした、これはこれでまた非常に別のタイプの実証主義的な研究がそろっておりまして、例えば薬学についての専門家であるとか、動物学についての専門家であるとか、博物学についての専門家であるとか、蘭学についての、それぞれの分野の碩学の方々のお話を伺いまして、私としても本来の私自身がやっている享保改革の吉宗の研究を広げられる非常によい肥やしといえますか、土壌というものになりました。これは、研究代表者もしっかりした人ですし、幹事も割と厳格でありますので、研究成果はちゃんと出しまし

た。

一言、これはオフレコですが、村井先生は非常によい先生で、私も大いに尊敬しているのですが、最大の問題は何かというたら、原稿を出してくれんという問題がありました。やることはやるんですけど、まとまらんのですよ。これは悪口だけではなくて、公でありますので、オフレコでありながら言いたいのですが、村井先生の還暦か七〇歳のときにパーティーがありまして、そのときに、あの先生はたくさんの本を書いておられますから、いろんな出版社の方がスピーチに立つのですが、次から次に出てくるのは、村井先生の原稿のためにどれだけひどい目に遭ったかという話のオンパレードで、その会は村井康彦糾弾集会と言うべき会になりました。

もう一つ、ちょっとおもしろいエピソード。

倉本 一応、今日は二五年史の座談会です。

笠谷 ついでに。この際ちょっと言いたいことがあるので。これは大事な話。先ほど出ました網野善彦先生、アジールの研究があったんですよ。実は私が網野先生に渡りをつけて、あれだけ高名でお忙しい人ですが、ひとつこはご出馬いただけませんかでしょうかといってお願いました。アジールの研究会はそれなりに井上さんが中心になって、よい研究会ができました。

さてこれをまとめるといふ段になったんですよ。まとめるといふ段になって、まとめは村井問題が発生して、ついに村井先生は出してくれなかった。ところが、実は網野先生は出してくれましたよ。網野先生が出し、ほかの人も八割方出ただけけれども、遂に非常に重要な研究家がですね。

井上 一言だけ。私はまだ若くて献身的やったので、あのシンポジウムを全部テープから原稿用紙に起こしたんですよ。にもかかわらず、班長の村井康彦は書かなかったんです。

倉本 出なかつたんですか。

井上 出なかつたです。

笠谷 出なかつた。

倉本 幻の。

井上 幻です。今、シンポジウムのやりとりもふくめあの原稿、どこへやったんか、わかりません。

笠谷 あの原稿、どこ行ったんやろうね。もう一回ちょっとあれを掘り起こさないといかん。これはほんと幻の原稿。

もう一つ、ちょっとあと一言ですけど。結局、網野先生はあの忙しいのに出してくれただけですよ、律儀に。あの原稿、どこ行ったんやろうね。それが不思議なだけけど。

ともかく、最終的に出そうな見込みがなくなつた。ところが、僕はとあるところで網野先生とまたばったり学会か何かで、パーティーか何かで会う羽目になって、まさに会わず顔がないわけですよ。それで、こちらのほうとしても、ううんという感じで、どう言い訳していいのかと、網野先生に向かつたんやけど、幸か不幸か、あちらはむちゃくちゃお忙しい方なので、そういう研究会とか原稿を出したということ全部もう既に、要するに過去の彼方に流されていましてので、私は命拾いをしたという、ちょっとオフレコの話をちょっと恨み節を込めて申し上げました。

倉本 わかりました。

笠谷 山田先生は非常に厳格な方で、しっかりやっておられましたので。

倉本 どうも長い間ありがとうございます。

笠谷 村井先生、ごめんなさいね。

倉本 じゃあ、初期の頃から参加されております鈴木先生にお願いいたします。

鈴木 皆さんおっしゃったとおりで、初期というか、エミナスの上でやった頃は研究室もなく、みんな机を並べて、顔突き合わせて、ぶつかったりしながら、ぶつかったりって本当に体がぶつかったりしながらやっていた時期が二、三年あったわけですね。

ほんとに熱気に満ちていました。皆さんおっしゃったとおりですが、言われていないことを言うと、助教授同士がものすごく議論をしました。私が覚えているのは、飲み会も含めてしょっちゅう、お互いの家にも行ったりとか、祇園にも行ったりとか、そういうのが一つ。教授の方々も同人雑誌を出したとか、みんなです。そのメンバーで同人雑誌を出すところが出版を引き受けてくれるところがあるでしょうとか、埴原先生はローマクラブみたいなやつを日本につくれないか、どうだという話を持ちかけられたりとかしました。

それから、よく覚えているのは、山折さんと中西さんと一緒に熊野に行ったのがありましたね。アイヌのことを梅原さんがやり、そういうことの一連の流れの中で熊野にみんなで行って、二、三泊しましたかね。

早川 二泊したね。

鈴木 二泊三日ぐらいで行って。

早川 十津川村あたりで泊まった。

鈴木 事務の方も行ったたり、私はかみさんと一緒に行った。

笠谷 北海道も行った。

鈴木 北海道、私は行っていないものですか。

早川 信州も行った。

鈴木 そういう旅行みたいなことをかなりやって、そういう意味で求心力というか、全員参加ではなく、有志だけですけれども、その中でいろんな議論をしてきた。私は正直言って共同研究会の幹事も幾つもやっていますけれども、共同研究会よりもそっちのほうが楽しかったかもしれない。共同研究会の方は、立派な先生方がいっぱい、若手も含めてとつかえひつかえいらっしゃるわけですよ。そして、みんな好きな話だけして帰っていくわけですね。それを聞くのはおもしろいですよ。しかし、だからどうなんだという、つまり、それが共同研究会と言えるのかなあという大きな疑問を私は持っていたんですね。そういうことも助教教授で話し合っていましたね。あるいは、最初から講座、岩波講座何とかみたいなやつをここで仕掛けて、本屋さんとタイアップしてやれば、それはそれでできるね、でも、それでは面白くないね、とか、そういういろいろな議論を。私は柏岡さんなんかとよくやっていたり、上垣外さんとか、そういう議論をよくやっています。

皆さん思い出に花を咲かせているんですが、私もその手の思い出がたくさんあるんですけど、私自身が感じていたのは、私がここに就職していなかったら、この共同研究会には東京から来ないなと思っていたのです。交通費が出て、話をしてそれで原稿をとられるだけ、搾取型だなというふうに思っていました。そういう意見は、例えばやめちゃったけど落合さんなんかもそう思っていたと思います。もちろん京大人文研は電車賃も出ませんでしたから、それに比べればはるかに我々は恵まれた条件だったわけだけでも、さて、参加者の労力に対し

て、こちらが何をお返しできるかということですよ、研究会の中で。私はそういうことを考えていったわけです。

本当にいろんな個性豊かな先生方とぶつかったり、助教授同士でもけんかしたりとか、そんなことはしょっちゅうやっていましたけれども、濃密なある種の空間があつて、この建物に移ってからもあつたと思います。非常に皆さん、意欲も満ちていたけど、どこへ行くのかわからない。笠谷さんが言ったとおりのようなことがたくさんあつたわけですよ。成果がまとまらない。それでいいのかなと。今だったら、ちょっと許されないんじゃないかな、ああいう牧歌的なあり方というのは。

共同研究会の幹事をやり、総研大のほうも始まって、尾本先生の下で進化論受容のこととかをやり始めたりした。それには総研大の高畑——今の学長とか、それから、石牟礼道子さんなんかを呼んで、熊本大学の原田先生が水俣の取り組みは最初がうまくいかなかったという話をなさいました。それを聴いていて尾本先生がおいおい泣き出して、というようなこともありました。原子力資料情報室の高木仁三郎さんをお招きしたときには、村上陽一郎さんと同期なんですけれども、おふたりが卒業以来初めて顔をあわせた。アカデミズムの外対内という微妙なやりとりも聴けました。印象に残る研究会がたくさんありました。そういう場所を提供する、別の言いかたをすれば、しかける楽しみもありますね。

ちょっと急ぎますと、井上さんから、桑原さんはスターリン型だったという、ああやらなきや成果がまとまらないよという話も聞いていた。大体、日文研のはサロン型で、いろんな人たちが集まってきて、笠谷さんの言葉で言うところの中戦、かみ合わない話をしている。だけど、それはそれでいろいろ刺戟になっていいということなんだと思います。

それから講座型というのも申し上げましたけど、私は実は編集の仕事なんかをその前にしていたので、桑原さん世代の仕事を引き受けていた河出書房の人と知りあっていました。あそこから『人類の歴史』というのが出始めたときで、今から見たら大変な仕事ですよ。生活史のほうに歴史学がシフトしていく時期にあたっていて、その担当の編集者、今、名前は出しませんが、が、こういうんです。「鈴木君、京大人文研、おもしろい。だけどあれは成果まともじゃないよ。つまり、一人一人は大変刺戟をヤトリして、それぞれ個人のいい本は出せるけど。それを考えないと、あなた、日文研にいても、どうやって成果を出すかと、ちゃんと考えなさい。一番の問題はチームなんだ。同じチームで中身が食い違っているのに平気でやっている」ということを言われた。私は、そのことを一〇年間ぐらい考えていたんですね。そういう問題が一つあって、ターミノロジーより、概念の問題を正面から押し出してみようとなったのです。

それから、学際的、国際的な研究をまとまりのあるものにするにはどうしたらいいかというので、『太陽』という雑誌、メディアスタディーズが盛る機運をみて、しかし、いわゆるメディアスタディーのやり方ではなくて、コンテンツを問題にしていく方法を考えた。『太陽』は総合雑誌ですから、時期は限られている。明治の終わりから、日清戦争から日露戦争過ぎ、明治の終りぐらいまでが最盛期。それで、これを共通のツールにしてやればまとまるだろうと、そんなことを考えた。それからさらに出版とジャンルの問題とか、そういう方へ移っていかないかと考えたんですね。

それとは別に、東京で、日文研に通いながらですけれども、大正生命主義の研究会をプライベートでやっていたんですね。共同研究が割と私は好きなのかもしれません。自分でやるよ

り、みんなを集めて、何か成果を出していくというほうがおもしろい。格好よく言えば、その中で自分が変われるということなんですけれども。

ただ、一つ困るのは、プライベートに集まって共同研究会をやって成果を出すのは、私が編集者になって、誰がなってもいいんだけど、エディターとして、こうしてくださいと書き直しもお願いできる。こういう編集方針ですからこうしますとできる。それに比べて日文研で成果報告を出すときに、どこまでやれるか。公に研究者を集め、公に出す場合、班員の間で明らかに食い違っている認識がある場合、どうするか。食い違いは食い違いではっきりさせればいいという考えもあるけれども、そもそも根本的に対立するようなこともある。公の場所で公費を使ってやっているわけですから、あなたの原稿引っ込めなさいというわけにはいかないですし、ここを書き直しなさいということもなかなかできない。そのところで実は非常に悩んだことが何回かあります。

共同研究会の持ち方、発表の仕方、そういうことはさまざまに経験して、いろんな問題を抱えて、それを蓄積していくしかないと思いますし、それを日文研がやるべきことだと思えますね。大学でもいろんなプロジェクトでやっていますが、大学共同利用機関がそういうノウハウを蓄積して、あとの人に参考になるようなことも出していければいいんじゃないかなというふうに思います。とりあえずそのぐらいにしておいて、後でまた言いたいことは言います。

倉本 どうもありがとうございました。

それでは次に、年数で言いますと、稲賀先生は三重大時代から参加されていると思われるのですが、だんだん最近に下ってきた話などもお願いいたします。

稲賀 最初に、第一期が八七年から九六年というお話がありました。私は第一期を知らない

人間です。神代というか神話時代は知らず、自分が生きている「歴史」時代はもうあまりおもしろくない、というのが世の常でしょう。あまり古い話はしたくないのですが、前任校は倉本さんのご出身の三重県津市の三重大学でした。人文学部という新設学部の文化学科というというのは、きわめておもしろいところで、完全に地域研究（エリアスタディーズ）で編成されており、日本、アジア、南北を含めたアメリカ、それにヨーロッパ地中海という四つのコースがあり、領域横断が国是とされ、地理学や人類学には愉快な同僚も多く、古くさい講座制の縦割り構造が分断されていた。ここも残念ながら神代の創生期ではない歴史時代からしか経験がありませんが、これが出来上がったのには、背後に藤波という政治家の尽力があった。思えば、在任中に突然ひどく立派な講堂が建ちました。司馬遼太郎が生前最後の公開講演をした場所ですが、当時、文部省の予算はマイナスシーリングで、新しいものは作れない規則。ところがふたつだけ例外があった。ひとつがこの三重大学の講堂、そしてもうひとつは、「できるはずではなかった」日文研の、講堂です。世界ひろしといえども、といって自慢しますが、そのふたつを渡り歩いてきたのは、いまのところ地球上に私ひとりだけです。ほかに自慢できるネタもありませんが、本日は共同研究が話題で、私、過去の共同研究について語る資格はないものは、まだ早すぎますか？

倉本 どうぞ。

稲賀 日文研に最初にやってきた九七年に、鈴木貞美先生の班にいらいただき、小僧のお遣いもできなかったのですが、鈴木メソッドがどうした理念に基づいて運転されてきたかは、只今お話がありました。私はその方法を学び損ねた人間ですが、まず共同研究とは何なのか。

人々が集って研究会をやっているわけですが、実際には研究発表会をやっているだけであって、共同で研究をしているわけではない。論文は各人がばらばらに個人名で書いてしまう。ときによってはそれらの論文のあいだで見解や事実認識が真っ向から対立したまま放置されたりする。これでは学術刊行物として責任放棄だという意見もありましようが、むしろ見解が水と油で両立しないという論争の場を設けて、そうした対立や矛盾を編者として可視化することにこそ、共同利用研のひとつの原初的な存在意義があるのではないか。

先行する共同利用研の実態も、耳にすると、たしかに最初は大変に熱意があるのだが、ある年数を重ねると、どうしても凝集力が落ちてしまふ、という。さらに所内で何をやってみても、みんなが集うというサロンのな雰囲気だんだんに失われていってしまう。二五周年を迎えて、我々も今、こうした老化現象をいかに乗り越えるかを考える潮時にある。

さらに研究という面に注目すると、共同研究と銘打ちながら、研究のほうは、費用も各自で工面せねばならず、贅沢はいえませんが、それぞれの参加者が個別に科学研究費補助金を獲得して、その成果を発表会の席に持ち寄る、という形が一般となっている。さきほど搾取型という話ができましたが、成果を持ち寄ってくれと頼むために旅費だけは弾むが、成果は共同利用研の達成として吸い上げる、というやり方でよいのか、という問題がある。

加えてこれは搾取の別の面ですが、三つめとして、すでに完成品の研究者は集うけれど、それなら次の世代をどうやって作るか、という問題が頭をもたげてくる。もちろん総合研究大学院大学が併設されており、私個人としては、研究の能力よりは、まだしも教育のほうが多少はましではないかと思いつつも、この年齢ではもう子孫造りは手遅れという自己認識ですが、そもそも後継者養成という役割は、共同利用研には与えられていない。次の世代への継承発展の

機能を最初から十全には与えられていない組織が、いったいどうやって生き残ってゆくのか、というところ、これは寄生虫か宿り木みたいなもので、どこから後釜を搾取してきて、その栄養を吸い取るしか、ほかに生き延びる術がない。

さらに四つめとして話題を転ずると、日文研は教授数わずか一五名であり、つまりスタッフ・メンバーだけでは必要な機能を維持できない機関です。一番大切な助っ人となるのは、海外からいらっしやる客員研究者の方たちで、これも一五名いらっしやる。初期のころには日本人も含めて、家族ぐるみ、夫婦、子どもたちをも含めた近所付き合いが、ある程度はできていた。少なくとも、亭主だけが仕事のうへの社交をして、奥方たちはそこには関与しない、という日本的イエ社会とはいささか違う方向を目指していたように思います。

ところがこれも年数がたつてくると、次世代の構成員たちの奥さんたちは、なんとなく亭主の職場には顔など出しにくいという雰囲気になってしまつて、とりわけ事務の方たちにそこまでのコミットはとて要求できないご時世となつてきた。となると研究者とその奥さんたちだけがちらほら来所する、というのみなにか釣合がとれなく、遠慮がちになつてしまい、客員の先生がたとも家族ぐるみのつきあいは敬遠されるようになってくる。客員研究者のほうでも、夕方の五時までは日本側と付き合い合っているけれど、それから後は切り離されてしまう。初期の牧歌的な有閑は消滅して、誰も彼も多忙を託ち、業績主義のセチ辛い世の中になつてしまったことも、これに拍車を掛けているように思われます。

早川先生もおっしゃつたように、最初のころは、それこそ裏研究会こそが本物だった。吉田光邦先生の追悼集など繙いても、人文研でもそうした逸話には事欠かない。だから共同研究会がいかに運営されてきたのか、についての歴史的反省をする研究会を共同でやらねばならな

い、と思っけています、実は真夜中を越えたりからが本番だった、というような逸話は、それこそ神代の話ですから、本当かどうかは知りませんが、それが新しい研究を生み出す力だったとすれば、そうした一種の創生期の、それこそ坩堝のような雰囲気というのは、残念ながら我々は、もはや二度と経験できない。アウトプットがきちんと生産できるような、いわば世間的な義務が果たせるように制度を整えれば整うほど、どうしても初期の何だかよくわからない、どこにゆくのかも分からないけれど、とんでもないものができてしまいう、という環境は、残念ながら急速に失われつつある。

そうした状況のなかで、共同研究をもう一度作り直すにはどうすればよいか。それを考えなければならぬのが、この場なのだと思います。すでに時間超過で、自分のことはあまり語りたくないのですが、ひとつだけ申しますと、私は日本の学会というものにあまりきちんと属してきた人間ではありません。博士課程の初期から一〇年ほど、北米圏ではなく、欧州を中心に非英語圏の外国をほつつき歩いて、一九八八年に日本に戻ってくると、ユマバ西部劇の真つ最中でした。つまり西部さんという人を中心にして、中澤さんという人類学者を社会科学の教室に任用しようとして、それが自然科学系の先生達の反対にあつて、大騒ぎに発展した。そのときに東京大学の駒場を辞めてしまったおひとりの村上先生がこの日文研に招かれたわけですが、ご病気でまもなく亡くなられた。先ほど網野さんの話がでしたが、私が駒場で付き合っていたのは、網野ジュニアだった、というような関係です。

日本に戻つてきて一番つよく感じたのは、日本の学会というものが、ひどく内向きに閉じてしまつてゐるという印象でした。仲間内のジャーゴンで身を固め、それが通じない外様を排除して、秘密結社のようなことをやつてゐる。ジャパニーズ・スタディーズという言葉を使う場

合には、そこでは日本列島内部での学会の仕来りとは尺度がまったく違うところで日本を捉えている。そうした海外からの学者と、どのように付き合うか。国際的、学際的、総合的と言葉でいうのは簡単ですが、それが許容される空間をいかに創るか。

それともうひとつは、日本研究者ではないけれども、世界的な水準で発言をする学識経験者がいる。それらの知的指導者とのように関係を繋いでゆくか、ということに関して、日本の学会は極めて脆弱である。お客さんとして呼んできて、ちやほやして、それでオシマイ。儀式は終わるのですが、きちんとした議論など、からっきし出来ていない。そうした欠点をなんとか克服するのも、日文研の役割のひとつであるはずだ。そのために私のような者でも何らかの役には立つのだろうか、と想着任しましたが、一〇年勤めてみて、その点に関しては、さしたる貢献も出きて居らず、内心忸怩たるものがあります。

一旦このあたりで。

倉本 今後のことについては、またご発言いただきたいと思います。

それでは、最近研究会を始められたというお立場で、戸部先生、お願いできますか。

戸部 最近研究会を始めたというよりも、実は私ここに来たのは一昨年、二年前ですけれども、共同研究員としてはかなり前から入っております、一九九〇年代の前半から実は来ているのです。その話を、むしろ外部から見た共同研究会ということでお話を申し上げたほうがいいかなと思うのですけれども、一言で申し上げますと楽しかったですね。

私が参加したのは木村汎先生がおやりになっていた「交渉行動様式の国際比較」という研究会でしょうか。その後に「危機管理と予防外交」というのがありました。それからちょっと間があきましたけれども、猪木さんがおやりになった、タイトルがえらく長いので忘れてし

まいましたけれども、「戦間期日本の社会集団の相互関係とネットワークについて」とかという研究会でした。

なぜ楽しかったんだろうというふうに今思い返しているんですけども、一つは私の職場が防衛大学校というちょっと特殊なところでしたから、なかなか外の研究者との接点がありませんでしたからだろうとは思いますが。ちょうど日文研の建物はできましたけれども、まだ講堂ができていない時代で、下から日文研のこの建物がすっかり見えて、いかにも学問の殿堂というところがよくわかったのと同時に、何でこんな不便なところにこんなものをつくったんだろうという意識があった時代でした。

私が所属していたのは国際政治学会という大きな学会でしたし、それから先ほどのテーマから申し上げて、もうおわかりのように、国際政治学会のメンバーが共同研究員の大半だったんですけれども、やはり学会は非常に大きな組織でして、同じ国際政治学をやっているとすると、理論をやっている人がいれば、あるいはアメリカのことをやっている、ソ連、ロシアのことをやっている、それから私のように戦前の日本の歴史のことをやっている、いろんな分野の人がいて、なかなか学会に行ったからといって接点はないんですけれども、それぞれ研究分野が少しずつ重なり合いながら違う人たちが共同研究会に入ってきて、それでいろいろな自分たちの関心のあるテーマを話してくださる、その成果を吟味することができるというのは非常に楽しかったという思いがあります。

先ほど懇親会の話もありましたが、その頃は日文研ハウスもありませんでしたので、日文研は河原町御池のロイヤルホテルをディスカウントで用意してくださいました。そうするとみんな大体、東京から来る者はあそこに泊まる。それから、帰りも大体新幹線で一緒に帰る。です

から、新幹線の中でもまだ議論が続いているというようなことがありましたので、そういう意味では外から来る者にとっては非常に魅力ある研究会、機会だったような気がします。

それは、一つは木村先生という非常にホスピタリーな豊かな先生が主宰して下さったからだろうとは思いますが。懇親会はもちろん外でやったこともございますけれども、かなりの回数をご自分のマンションでおやりになりました。それで、奥様あるいは近くにいらっしゃる共同研究員の奥様も来てくださって、手弁当のパーティーだったですから、どうやってお返しすればいいんだろうとみんな悩みつづ、ワインを持ち寄ったり何かして、非常に楽しい研究会でした。時々はアトラクションがありまして、今度は春画のアトラクションがあるからと、それにひかれて行ったことがございます。すみません、早川さん、アトラクションと言いまして。

もう一つ、楽しかったというか、自分にとって有益でありましたのは、先ほどチームのことがありましたけれども、どうしても外に出ずに狭い分野で研究していると、自分の関心以外なかなか広がらないんですが、それが、日文研であるテーマが設定されていて、それに何らかの形で関係するような研究者が集まると、自分の研究テーマや関心がやっぱ広がりますし、たぶん私も日文研の報告書で書いたような論文は、ここに加わらなければおそらくテーマとして選ばなかっただろうし、書きもしなかっただろうなと思いますね。そういう機会を与えられ、しかもそういう研究も自分でやらざるを得なかった、文章にしなればいけないかったというのは、今までの自分の研究者としての道を考えると非常にいい機会を与えて下さったなあというふうに思います。

時々、先ほどの鈴木さんの話じゃないですけども、原稿を直されたこともありましたし、原稿を随分、たぶん木村先生が入れたんでしょね。読み易く直されたこともございました。

た。

一度私は「交渉行動様式の国際比較」というので、一九二四年のアメリカの排日移民法というテーマでやりました。そのときの大使がいかに凡庸であったかという話をずっとやっていたんですよ。大使は実は埴原正直という、ここにいた埴原先生のお父さんでして、後で、ここにお子さんがいるんだよと言われまして、同じ研究会のメンバーでなくてよかったなあと思ったこともあります。

あともう一つは、どうしても社会科学というと人文学ほどの広がりがないせいか、少しずつテーマが違っていくところでもどこかで同じ学会に所属していたりということ、割と近い人たちが集まるのですが、木村先生の研究会で私が非常に魅力的だったのは、実務家を招いて、ゲストスピーカーとしてお話をしてくださったことで、例えばソウルオリンピックの招致で裏方を務めた韓国のジャーナリストのお話であるとか、一回もご報告なさいませんでしたけれども、研究員の一人として人事関係のコンサルタントか何かをおやりの人がいまして、その方はどうも労働争議のいろんな交渉をやって、コンサルタントとしての役割をなさっている方のようでした。懇親会などでそういう人の話を聞くのも非常にもしろかったですね。危機管理では、警察のご出身で、それこそ日航か何かにもその後勤めになって、危機管理の現場を踏んでいらっしゃる方に、これも共同研究の班員として加わっていただきました。現在は相撲協会のお偉いさんになっていらっしゃいます。今も危機管理をやっているんじゃないですか。

自分がここに赴任しまして共同研究会を主宰するようになって、一番頭の中にあるのは、こういうときに木村先生はどうやったのかなとか、こういうときに猪木さんはどうやったかなというところで、前に外から見たとき自分が印象を受けた点とか、おもしろかったなという点は、ど

うにかして生かしていきたいということ。そういう意味では、今来てくださっている、特に関東方面から来てくださっている研究員の方々は、楽しんでくださっている、まだ一年目ですけれども、それはありがたいなあと思います。

それから、これはある外国人の研究者ですけれども、東京の研究会に行くと言言の順番が決まっていると言うのです。

鈴木 それはよくみなさん言いますね。

戸部 大体、誰先生がしゃべって、その次は誰先生と決まっているというんですけれど、日文版の研究会は順番が決まっていけないからいいというんですよ。

そういう意味で、私も自分の経験をどこかに知らず知らずのうちに生かしているといった方がいいんでしょうか。そういう形で反映させているんだなというような感じはいたします。

あと二年間続けなければいけないとか、続けるんですけれども、これからもっと活性化していかなくちゃいけないかと思うと同時に、どうしても早くこちらに呼んでくださらなかったのかなと思って。一回だけじゃ、ちょっと物足りない。もう一回ぐらいやりたかったなという感じがいたします。そんなところです。

倉本 ありがとうございます。

鈴木 私はちょっときつい言葉で搾取型なんて言いましたけど、だからこそ、来てよかったな、続けていきたいと思ってももらえるようにするには、何かをこちらがいつも提供していくということ、それがとっても大事だと思います。

それから、同じことですけれども、これは共同研究会じゃないんですけれども、国際シンポジウムでも、東京の学会へ行くと、偉い先生方が発言することになっていて、自分はとても発

言できないという雰囲気なのに日文研は違いますねと言われることが多い。僕らはそれが当たり前だと思っている。コメントーターにうんと若い人をつけたりもしますが世間は違うのかもいけない、もっと違う風が吹いているのかもいけないというふうに思っています。

倉本 私のところでも、研究員の方みんな口をそろえて、こんな楽しいことはないなんておっしゃると、よっぽど大学ってつまらないんだなあと実感しています。

それでは、だんだん若い世代になりまして、近い将来に共同研究を開くでありますようリユッターマン先生に一言お願いします。

リユッターマン 私の先輩はほかにもいらっっしゃいますので、山田さん、松田さん、劉さん、共同研究に熱心で、有能な同僚がいるのに、なぜ私か。私に対する何らかの教訓かなとか、いろいろ心配してまいりました。私より先に声を上げる方がいるという指摘をしたいと思いません。

一二年ほど前、日本学の歴史書、日本学の入門書をまとめた際に、序論としてドイツにおいての日本学の歴史をまとめたとき、二〇年代に生まれた人まで名前を取り上げて明記したわけで、その後たくさん日本学者がいますので、触れない人は後で、どうして私は指摘されないかとか言われがちですので、そこはやめました。ということで、私は幹事を務めた鈴木さんの共同研究と猪木所長の共同研究には言及しないように、と思います。

倉本 後でまたお願いします。

リユッターマン 我々資料を手渡されたことは既に指摘されたとおりで、それを見ますと日文研では非常に多彩で多様な研究が行われてきたことはありあり見えてきます。少しだけ取り上げますと、私自身の記憶ではなくて、単に資料上のものを言えば、「日本人の他界観」「日本文

化の新断面―かざり並びに奇人研究」「短冊の研究」、短冊だけを見て、非常に細かいものを中心に研究したものもあれば、また「現代日本人の労働・遊び観および行動の歴史的発達」、あるいは「将棋の戦略と日本文化」など、非常に多彩で、ただおもしろい。まとめたものもありませんし、まとめてないものもあるんだけど、研究成果が出版物になっていて、今、手にすれば非常に多彩で、視野も広く、いろいろな刺激を受けます。

個人的には、例えば「日本社会における会合の実態とそのもつ意味についての歴史的研究」もこの場でできました。もしくは、特に私は手紙を研究していますので、恋文の場合には、この赤澤先生の「通婚圏、配偶者選択および性淘汰によるヒトの進化」など、そういったものを読み合わせてみれば、いろんな連想が起きて刺激を受けます。ほかにもいろんなものにすぐに触れられたのですけれども。

要するに、私みたいに日本学者としてスタートした者は、例えば今この頃のように、よく海外で災害の場合は、なぜ日本人はこんなに冷静に大きな災害に堪えるかという、この頃よくそういう問い合わせを受けます。そういう場合、例えば災害に関して言えば、これは日本文化の歴史に深く根付き、一つの民族の慣れ、または癖、契沖という学者は癖という言葉を使っていました、よくも悪しくも慣れになったもの、それは歴史的研究で幅広く視野に入れないと、なかなかさういった今のような災害に対する、よそ者から見れば特殊的と言いがちなさういうところを説明できない。それを幅広くさういった刺激を受けるところにいることは、私も非常に感謝を持って考えております。

もう既に指摘されたように、さういった学問の肥やしをどのように生かしていくか、私たちにとっては本当に恵みでもあれば、非常に大きな重荷にもなっているというふうに私は実感し

ております。これから、そういったものをどのように整然と展開させていくかは非常に苦しい思いもしております。

つまり、今までのそういった共同研究の性格を見た場合、断片的なものが多いです。刹那的な側面もあると言わざるを得ないかもしれない。今、皆さんの記憶だけでも驚きました。覚えていない、ちゃんと記憶していない、だからこそ出版物がどれほど大事なのかということを改めて実感できましたけれども。また、考察的な弾みが多いですね。アリストテレス風には、一歩ずつは進まないで、右左に弾んだり跳ねたりして、踊ったり、言ってみれば遊んだりする。懇親会とすぐ連想なされた早川さんの言葉は非常に興味深かったです。懇談会に焦点が移りがちなという、そういう雰囲気は学問の歴史の中でいえば、幾つかのそういう分野が必要な中ではカオスというもの、そこに重点を置いて、我々は集えばカオスでいい。そして個人研究に戻れば整然としてそれを生かしていけばいいという、もしかしてそれが日文研の一つの特徴であるかもわかりません。

しかし、先ほども触れられたサロン系の雰囲気などは本当に人次第で、その代表者の性格次第で、それでいいと思うんですが、資料を調べてみれば、「研究と活動の足跡」ですか、この中での説明を読めば、「共同研究を主宰しようとする本センター教授が代表となり、補佐する幹事らとともに研究テーマを選定する」と。私は経験したことありません。そういう出発点があったということは非常にもしろくて、今は選定するのは代表者であって、幹事という機能はどんなものか、皆さんにも経験者には説明をしていただきたいと思いました。

最後に一点、ちょっと強調して表意したいのですが、研究は総合的なものでなくてはいい、そしてそれを最後に総括するのはなかなか苦しいという指摘もありましたが、私もそれを

痛感しておりますとともに、そもそも出発点においては既往の研究というまとまりがあまりないというような事情があると思うんです。なぜこの分野について今や共同研究を行うかというその段階で、個人研究のように一〇枚、二〇枚の研究文献をまずまとめて、そうした研究がある上で、どこか穴をどのように埋め尽くすつもりかという、そういう計画性でさえあまりなさそう。そういうところに問題があるかないか。私は問題あると思うんですけども、必ずしもそういう結論は出なくていいかもしれないので、皆さんの意見を募ってみたいと思います。ありがとうございます。

倉本 どうもありがとうございます。本質的な問題にかかわる鋭い指摘をいただきました。

それでは、過去の話はさておきまして、現状の問題点がどの点にあるのか。大体明らかになってきたらと思えますが、また、将来に向けてどういう展望を持ってほしいのか。特にペテランの先生方に、後進の者に向けて言葉を残していただきたいと思えます。

では、白幡先生にまず口火を切っていた方がいいでしょうか。

白幡 最初の一〇年の共同研究会については一〇年史に書いてあります。そして一〇年間は日文研の共同研究会誕生期というか、日文研的な共同研究ができ上がっていく過程ではなかったかと思うのです。私が幹事として最初にかかわった共同研究は日本人の起源をさぐるうというものなんです。そんなテーマに最初は全く関心を持っていなかったんですけど。この研究会にかかわった結果、後でほかの研究班で発表したテーマですが、お雇い外国人医師のベルツが日本人の起源のことを書いているんです。これは全然日本人が考えなかったような日本人の起源論をドイツ人が、人類学のとくに専門でもないのに見事に展開している。しかも、日本の資料をちゃんと発見し駆使して研究をやっていた。『国際日本研究』という視点の大きさを示す研究

事例です。私にとつては、共同研究の成果に貢献できたかどうかは別として、自分にとつて大変役に立つものを身につけさせてくれたという感謝すべき共同研究会でした。

その次に幹事をやったのが「日本人の他界観」という久野昭先生の共同研究会です。他界観というのは、(リユッターマンさんの発言の中で、幹事と班長が相談するか?という疑問が出されたんですけど)、当時は随分相談しまして、例えばタイトルにしても「他界観」ではなく「日本人のあの世観」にしようかと議論になった。「あの世」というのは、時間的に同時性があるけれど、「他界」というのは時間的には連続というか、次の世界じゃないかとか、一回目の研究会でもタイトルも全員集まってねり直しというか、変えようかというような議論もしました。

二期目というか、一〇年ぐらいすぎると、井上さんはスターリン型と言われたんですけど、人文研の桑原研究会のような大体指導者ないし、しっかりした代表者がいて、作戦に従って、幹事役の参謀から兵隊までが全体として効率的に研究会をやっていくと。そういう感じから日文研の共同研究会はだいたい変わってきたと思うんですね。

それから、変わり種で言うと、僕が幹事をやらせてもらったのは杉本秀太郎さんの「短冊の研究」というのですが、短冊の研究会は二〇回ぐらいあったんですけど、毎回、「短冊読会」なんですよ、毎回のテーマが。次回、「短冊読会」、三回目、「短冊読会」というので、全部それで終わった共同研究会。ほんまかいなと思われるでしょうが本当です。一人が一つの短冊(書かれた歌だけでなく)全体について解釈を述べて、それにいろいろな分野の人がそれぞれに意見を述べる。その研究会の中で文学史の人もいた。植物科学の人もいた。それから動物学の人もいた。社会学もおつた。美術史もいた。早川さんも入っていた。井上さんも入っていた

かな。

井上 いや、私はさそわれもしませんでした。

白幡 ほんとにそれぞれが自由勝手に見解を述べて、結局あれは短冊の読解をやったという締めくくりで、まとめの本は出してないですね。

早川 出てないと思います。杉本さんのはひとつも出ていない。それでいてたいへん印象にのこっています。

白幡 だけど、こうした共同研究の成果をどう考えるかというときに、この研究会は、参加各人にとってはその後いろんなことをやるのに随分役に立った、発想の多様化にも大変貢献してくれたと思うんですね。

日文研の中でも共同研究会のやり方はずっと変化してきていて、それぞれ、何ていうかな、自分の出身の専門と違うところに何か切り込んでいくことができないかという思いは、いつも誰もが持っていたと思います。

それと、共同研究は実は個人研究だと思っんですね。中西さんにしても、埴原さんにしても、中西さんは「日本文学と『私』」、埴原さんは「日本文化の基本構造とその自然的背景」、全部自分の説を証明したいという感じですね。それが最初の一〇年で、その次は、もう一つ、必ずしも自分の説を証明するんじゃないやなくて、幹事とともに自分がこれまで考えていなかったことをどこか見つけたいというような、そういうテーマ、選択が増えたように思います。

二〇年目からか、いつ頃から三期目とも言える時期に入っているのかわかりませんが、共同研究のベースには各人の個人研究でやりたいテーマがものすごく大きくかわっているのが日文研の共同研究の特徴ではないかなと思いますね。

それをやるには、ちょっとリュッターマンさんの考えと違って、何か後世に残ることを目指したり、体系的だとか、時代を超えるような論理性とかの獲得よりは、これまで思いつかなかった、それも内容というよりはこれまで思いつかなかった仕方、見方を試みる。それはたぶん人文研とか民博とかには少なかった、日文研に色濃くある方向じゃないかなというふうに思っています。

そういう点でたぶん懇親会というのは非常に大きな意味を持っていた。一応表立った議論というか、要するに専門的研究のテーマは大体五時か六時までに終わって、その後そのまま続けるんじゃないくて、場所をかえて全く違う視覚から議論をやるという懇親会方式がなぜ定着化したかという点、その起源は京大の人文研の、それも桑原時代のものではない。これは井上さんと私が参加していて、亡くなった園田英弘が当初ずっと幹事をしていた人文研の吉田光邦班のやり方から来ているのではないか。吉田班ではいつも研究会が終わって、土曜日でしたけれど、六時ぐらいから食事して、大体三代会ぐらいまで行く。みんなでわいわい議論する。一番遅いときは明け方五時ぐらいまでやる。

井上 朝日を見たこともあったね。

白幡 朝までやったこともあります。それを毎週か、少なくとも二週間に一回ぐらい続けている。あれは京大の別に人文研に共通する共同研究会のやり方じゃないと思う。吉田光邦班の習慣が食事をやる方式を最初の教授方に植えつけてしまったのかもしれない。それで、日文研ではあれはやることにどうもなっているようなんですけど、別に必ずしなくてもいいんですね。

倉本 そうだったんですか。

白幡 発足当時の日文研では我々が好きでやっていたような気がします。それはやっぱり幹事が率先して。

早川 教授陣がみんな好きだったんですよ。

井上 やっぱりやってください。「赤おに」が困ったはる。

倉本 毎回違う店を探すので、私とかも大変なんです。

井上 時折「赤おに」で。

倉本 時折、じゃあ。

白幡 つまり、共同研究会って形式も案外に更新されていて、その結果変わった成果が生み出されているというふうに僕は思っているんですけど。もちろん全部をそのまま続ける必要はないとは思いますが。全部洗いざらい新しくやり直しても構わないと思うこともありますね。

共同研究会と一口にいうけれど、共同研究会をどうも「共同研究」したことはないんですよ。桑原さんが始めたというのは定説になっていきますけれど、その後どう変遷してきたかは、わかってない。今編纂中の日文研二五年史で初めてこれがわかるようになるかもしれない。そのため、スタッフの皆に共同研究についてのイメージをもっと語ってもらって、二五年史の叙述に生かしてもらえると、おもしろい学問誌ができるかもと思っています。

倉本 どうもありがとうございます。

特に将来の共同研究に向けてお話しただけだと思いますので、こちらから順番に、早川先生から簡単をお願いします。

早川 先にも話しましたが、私がいま提案できるとしたら、やはり表の研究会の後の懇親会をふたたび活性化してはどうかということでしょうか。リュッターマンさんがいわれたように、

学際的な学問の方法として整然と議論を進めてゆく方法とは別に、逆にボンボンと飛躍しながら、新しい発想を得るといふ方法があるのではないでしょうか。そうした場として夕方からの懇親会を位置づけることがふたたび重要になってくると思います。

単なる飲み会でも面白い会話はできると思いますが、センターの立地条件を考えてみると、日文研の共同研究会独特の懇親会が可能だと思います。千年の東京都という立地もそうですが、年四、五回開かれる共同研究を考えますと、京都の四季をとりこんだ懇親会がいろいろと可能だと思います。

サクラ、新緑、アユ、川床、モミジ、湯豆腐など、すぐにいろいろとプランが立てられます。これまでいろいろなプランを立ててきましたが、私としてはそうしたプランを新しい人たちに遺しておきたいと思っています。

井上 笠谷さんがさきほどおっしゃった美の数量化というのは、こういうことですね。数量化し尽くした上に余白として数量化し得ない美しさがたちあらわれるというような考え方だったんですよ。若かったんやね。ヴィトゲンシュタインか何かに憧れていたんだと思います。あのころは気取ってたんやね。

桑原さんのことをスターリンだと言いましたが、それは桑原さん自身がおっしゃっておられた物言いなんです。民博で「私はスターリンになりました」と、そう言いきはった。だけれども、スターリンになったと言わはる、その下で働いていた人たちは皆、桑原さんを温かく思い出していました。あの口の悪い、人の悪口を言わせたらもう天下一品の杉本秀太郎でさえ、桑原武夫の思い出を語るときは本当に顔をほころばしていましたね。杉本さんだけやない。そういう人は多いんです。だから私は、彼をただのスターリンだと思いません。自嘲ぎみにス

ターリンとおっしゃったんだと思いますが、人望もありました。

あとついでに、いやらしい話をしますが、桑原さんの共同研究はほぼすべて岩波書店から出ています。林屋辰三郎さんの本も岩波書店から出ていました。当時の人文研には、共同研究は岩波書店というルートがあったようです。今、私たちの共同研究へ「ぜひうちください」と出版社が声をかけてくることはありません。「私たちが一〇〇何部か買い取りますから、ぜひ出してください」と、こちらから拜むような格好になっています。そのことを私は切なく思います。いや、学問は細分化されました。精緻にもなったと思います。コピーの機械ができました。要るところだけそれでうつけばいいような時代に、昔のような出版はあり得ないかもしれません。だけでも、桑原さんがやらはったことを見ていると、論文集をホッチキスでとめるような本、いるところだけコピーをとればそれで済むような本ではない、まとまりのある本をつくりたいという情熱はあったように思います。

「ちょっと偉そうな言い方ですが、私もそのひそみに倣いたいと思っていました。『性的なことば』という私の班の報告書には、たぶんこの研究所ではおおむねバカにされていると思いますが、私なりのそんな思いもこめています。例えば「わかめ酒」という言葉の由来、班員は誰も知らないわけです。お互いに一から調べるわけです。そして、その項をうけもって書いた人間は自分の書いたものを全員に配って、二回も三回も手直しをお互いにし合って、つまり私は桑原さんになりませんでした。いや、なれもしませんが、全員で全員の原稿を点検し合うというのを重ねてまとめました。やり方によっては、まだそういう手だてで一冊の本をつくれる、まとまりのあるものにして、一冊丸ごと読みたいという読者もそこそこつくり出せるという、そんな志が私にはありました。

もちろん、私なんかのことはばかにしていただいて結構なんです。何か共同研究のありようというのを考えたときに、お互いあまりそりの合わない、精緻かもしれないけれども、ホッチキスでとめたような論文集をつくって——ちょっと嫌み言っているよね。嫌み言うているのをわかった上で言うんやけれども、日文研が一〇〇何部か買うからというので商業出版に持ち込む今のあり方に、いや私もいずれはそのしくみに依存するようになるかもしれないませんが、何か切ないなという思いを抱いています。ということで、マイクをお渡しします。

倉本 それでは稲賀先生、お願いします。

稲賀 井上さんは『性的なことば』を纏められました。これは社会還元に対応しい形の出版を追求した結果の、ひとつの巧妙なる到達点を示していると思います。おまけにこれは共同作業でやらねば出来ないという意味でも、共同研究の意義を再確認させてくれる、絶妙なる編纂物です。その井上さんから私は嫌みをいただきました。私の研究会では『伝統工藝再考』と称して、八〇〇頁を越える報告書を作ってしまった。「あんなあ、あんな枕みたいなものこそあって、誰にも読まれへんで」と言われたのですが、これは凶星ですね。とはいえ反対に、誰にも絶対通読なんかできないものを残してゆく、それが学問だ、というリュッターマン先生のようなご意見もあるはずで、これだけの振幅があるということが、健全か不健全かはとにかく、日文研の厚みであり、深みにもなっているように思います。

実は私、本日の集いで一番不安なのは、ここに外国からの客員の先生がひとりも見えていない、ということ。共同研究を遂行する場合には、私見では、専任教授には三つの資質が要求されている。まず、マスキミに対して発言力がある。この席の両隣にはその点で尋常ならざる力量を発揮されている同僚が座っておられますが、これは日文研の求心力の源です。それか

ら第二に、特定の学会については、そこで一目も二目もおかれるだけの權威と力量を發揮し、さらにその特定の学会組織を離れ、それを越えたところでも通用するだけの学才が世間に認められていることも、最低限必要でしょう。それが昂じて、学会などには目もくれず、学者共同体からは村八分になってしまった強者がおられるのも、まことに心強い。そのうえで第三としては、外国と日本語以外のチャネルを持っている、というのも、要件に数えなければならぬと思います。もちろん、これら三つの能力をひとりの個人に要求することはできません。しかし専任の教授には、おおよそ三分の一ずつの構成員が、この三つの能力のいずれかひとつは、最低限發揮してくれないことには、日文研の共同研究は、地盤沈下を余儀なくされるでしょう。これは今からさき、それこそ世界を先取りして、次世代を担ってくれる研究者を日文研に連れてくるためにも必要な条件であり、またそうした人選をするさいの基準、クライテリアとなるでしょう。

そのうえで、共同研究の現状と将来とについて、今思いついたことを、幾つか加えます。

私も今、管理職をやらされており、国際と研究担当ということなので、第一に、国際共同研究をどのように発展させるかということが、差し迫った課題となっています。そこで考えているのは、外国からお呼びした客員研究員の先生方をお客さん扱いしては駄目だろう、という事です。つまり専任に匹敵するだけの働きをしていただけるような環境を創っていかなくてはならない。そしてその協働作業は、このセンターの敷地内部に限られたことではなく、世界大に広がってゆく。そうしたネットワークを、電子化事業の推進とともに、どのように築き上げてゆくのか、それが大きな課題となっています。

二つ目は、創設二五年を経て、何が充実してきたかといえば、資料が極めて充実してきた。

この一次資料を使った研究という課題は、山折所長時代から、ずっと話題には持ち上がっていませんけれども、さあそれを実際にはどう立ち上げるか。井上さんにはご意見があって、つまり図書館にみんなで集って一次資料を前に共同で研究を造り上げてゆく。そうしたワークショップの研究は、早川先生も今、外書館をアトリエとして構想しておられます。ワークショップで次世代専門家を育てながら、共同研究を未来に繋いでゆく。そうした試みは、まだ出発点のようにやく迎り着いて、計画立案中という段階ではないでしょうか。

三つ目としては、最初の発言と若干重なるかも知れませんが、今度は国内の客員という方たちにもどのように関わっていただくか、という問題が出てくると思います。国内客員制度は、必ずしも十分にはその潜在的な機能を果たしていない、というのが私の見解です。日文研の専任スタッフだけでは補えない欠落の箇所を、国内でこの人しかいないという人材によって補ってゆくことが大切ではないでしょうか。今のご時世ではなかなか難しいこととは思いますが、そこまでのコミットメントを要求できて、しかもそれをお願いできるだけの学術環境を整えてゆく、という方策をまじめに考えるべき時が来ていると思います。日本全国津々浦々に、はっきり申して似たりよったりの共同研究会、あるいは週末研究会が山ほどあるなかで、日文研でなければできない成果を示してゆくことなくしては、日文研の存在意義、共同利用研のレンジ・デートルは堀崩されてゆくことになるでしょう。

そのうえで、もう時間ですから、最後に二つだけ提案をさせていただきます。

ひとつは、いままで共同研究会は全部で一五本走らせればよい、というのが大前提になってきました。しかしその限界がいたるところで噴出しはじめています。それを乗り越えるための工夫ですが、一方では鈴木貞美先生のやっというらっしゃる仕組みが参考になりそうです。つま

り大型のチームとなった研究会のなかに、いくつか分科会を置くという対応が、当然ながら出てきている。陸軍組織に似ていますが、五人のチームで何かをやり、それが三つ合わさって一五人となり、四五人となったところで、もう一段高いところを狙う。二段ロケット、三段ロケットにして高い軌道を狙うという方策です。こうした仕組みは、無理に制度化する必要はないでしょうが、現場でのノウハウを交換してゆく智恵は重要です。

もう一方は、その反対です。一五本の共同研究とっていますが、例えば人間文化研究機構での連携企画とどのようか噛み合わせるのか、それとも別立てとするのか。そうした基本的な制度設計が、法人化ののち六年を経過しながら、現時点ではまだ出来ていません。そうしたなかで私など、試行的に始めましたのは、例えば劉建輝さんと私の班で、相互乗り入れの合同研究会を開催する。事務方にはある程度ご迷惑をおかけすることにもなりかねませんが、ある程度、各班が練れてきたところで、無理矢理ぎゅっぐゅっつくと、ちょっと時局向きでアブナイ発言ですが、核分裂反応が始まって、知的な炉心融解が発生する。良い意味での知的核分裂を、研究会同士を衝突させることで発生させるような工夫は、考えるに値するだろうと思います。とかく機構絡みの連携企画などは、屋上屋に負担を増やすばかりで現場の疲弊を招く、と消極的な反応がありますが、そうした厄介な企画にたいしても、我々として能率的に、しかも負担を増やすことなく対応するような体制がとれるのではないかと。それはなにもひとり日文研だけの内部で閉じるのではなくて、例えば歴博、民博などとの共同研究会の相互乗り入れ、というのも、前向きに取り組む余地がありそうです。いままでですと、何となく機構絡みで頼まれたので断れずに乗せられて、自分の首を絞めるような場合も生じていますが、むしろ機構のなかで主体的に上手にネットワークを張ってゆく、攻めの姿勢にできることも、あるいはでき

るのではないでしょうか。私自身は、そろそろそうした威勢のよいことを宣言する元気が、年齢的になくなりつつありますが、次の世代には、そうした合理化の工夫をお願いできれば、と期待しています。

倉本 どうもありがとうございます。

六時半までということ、最後に猪木所長の総括も必要なんです、それも考慮していただいて、笠谷先生、お願いします。

笠谷 ちょっと話を振り返っているかもしれないのですが、スターリン云々かんぬんというのがありました、共同研究を始める場合の幾つかの要するにパターンの問題かと思えます。ど、仮説検証型の共同研究というのは最初標榜されたんですよ。だから、それをやりますと、当然一つの指導者といえますか、主宰者の出している一つの仮説、そのたぶん典型になるのが植原先生の日本人二重構造論というやつがありました。それから村上先生の日本型家社会論もまたそういうタイプの一つであって、その妥当性云々を検証する、つまり多くの人々が一つのグラウンドセオリーを検証するという形で寄り集まってきてやるタイプの研究会があります。これは当然指導型、スターリニズム型といえますか、トップダウン型の構造になりやすいと思えます。

その対極ですね、それは特定のテーマを持たずに、とりあえず寄ってみて、いろんな異分野の人が集まることによって、よそは知らないけれども、思わぬ何かが出てくるのではないかと、いうことを期待して、ある意味無責任だけでも、やってみたら結構おもしろいことができる。

ちょっと手前みそになります、さっき村井先生の悪口を言ったんですけど、今度は井上さ

んにかわって私が幹事を引き受けまして、村井・笠谷体制でやると。ちょっと思っていました。村井先生、とにかく成果は出しませんから、最初から引き締めて、絶対に成果報告を出すという心構えでそもそも始めたのです。しかし、村井康彦・笠谷和比古で、さあ何をやるかといったときに、村井先生は公家が専門だし、私は武家が専門だから、「公家と武家」というテーマでやりましょうという、これはかなりいいかげんな問題設定で、グラランドセオリーも何もないわけです。

ところが、「公家と武家」という対極を設定してみたら、最初は日本史のつもりでいたけれども、いや、もうちょっと中国の文人型社会と日本の武人型社会というものを取り入れてみたらどうだろうか。いや、日本の武士道とヨーロッパの騎士道があるから、日本の在地領主制とヨーロッパの封建領主制を比較してみたらどうか。そうしたら、そのうちオスマントルコにもそのような擬似封建制というのがあるという話になって、オスマントルコだ、アラブだとか、じゃあ朝鮮は一体どういふふうな関係になるのかというふうにして、やっているうちにどんどんどんどん広がり始めてきた。最初は日本史の中における二つの勢力の対抗図式の話で始めたつもりが、いつの間にか話をしていく間に、いや、それならばほかの国だったらどうか、こうなっているかと。そのうちに、中国、東アジアでは、中国や朝鮮は朱子学型、つまり華僑官僚型の世界であるのに、どうして日本の社会だけがこういう武家封建領主制という形、つまり東アジアの中で異文化を形成したのかと聞いていたら、いや違う、実は朝鮮にもそういう武人型の政治体制ができる芽は高麗朝の後にあったんだという、これは全く知らない話なんです。突如そういう話が出てきた。そういう形でどんどん広がっているうちに、最初の第一巻目のやつはつくったけど、いや、これだったらまだやり足りないところがあるという、第二弾

は今度は家という制度を、家という概念は極めて日本的だけれども、これをもうちょっと言うと普遍的な観点でとらえてみたらどうだろうか。ヨーロッパに行くとかダンゼンハウスという考え方がありまして、これはオットー・ブルンナーという人が立てている理論なんだけれども、それと今度は日本の家論と突き合わせるという形の比較研究ができる。さらに今度は、天皇制だ、儀礼の問題だという話になり、そして最後は総括的に「官僚制と封建制の比較文明的的研究」という形で、四回やりました。

さらには、もったいないから、国際シンポジウムをつけましょうという形で、「公家と武家の比較文明的的研究」というやつをやりました。結局、このシリーズは五冊出すことができずした。あの手ごわい村井先生にちゃんと書かせたということが、私はこの間、共同研究の中でも一番誇るべき点なんです。これだけは僕、井上さんに勝っていると、誇らしげに宣言できる場所なんです。

ちょっと手前みそになりましたが、さっき言ったとおり、仮説検証型から出発して展開するタイプと、ぼやっと寄り集まっているうちに、まさにプラズマ状態みたいなものができてきて、それがいつの間にか臨界点になって、成果ができてきてという、そしてそのことによってまた次の研究分野が見えてくるというふうな、そういう核分裂反応型の研究もあり得るということです。

ただ、先ほどからの指摘にもかかわらず、じゃあ岩波がおまえのところのやつを引き受けてくれるかというと、それは確かに一〇〇部買い上げ型でその本を出してもらっているというところの弱みはあります。しかし、これは私が思うに、どうしても創業のときの華々しさと守成のときの難しさという問題だと思います。創業のときはやっぱりアドバロンが上がりやすか

ら、マスコミはみんな、それならばと来るわけです。しかし、どうしてもそれはマンネリ化してしまいうけですね。マンネリは結局、要するに沈滞のもとになるわけですが、この持続の中をどのようにやるか。それはつまり守成。この守成の功というのも、創業の功とともに、ひとつ考えてみなかったら難しいところで、要するにマンネリに陥らずに、しかもこれを持続させるという技は何なのかですね。ちょっと私には具体的な提案はないわけですが、歴史がもたらすサイクルの運命を我々が共有するものではないかと思いが、私の感想という形にさせていただきます。

倉本 どうもありがとうございます。

ちょうど六時半になりましたが、鈴木先生、お願いします。

鈴木 簡単に。桑原さんのフランス革命の研究というのは仮説があったわけではなくて、学際的に切り分けてやった。それをいわば講座型と私言っているんですけど、いろんな講座のつくり方があるでしょう。それを本屋とタイアップしてやる。それは否定すべきことではなくて、日研でもやってもいいと思います。

それから、埴原さんが言ったのは仮説攻撃型といって、自分の仮説を攻撃させるということを意識的に考えたけれども、しかし誰もうまく攻撃してくれない。偉い先生だからどうしても、ちょっと欠点は言うけれども、大体褒めているわけで、自分の学識を鍛えるのには十分にはならなかったということを彼は残念がっていました。たしかになかなか難しいと思います。本人にその構えがあっても、でたらめな根拠のない攻撃はされても困るわけで、それはなかなか難しい。もっといろんなやり方があると思う。例えば同世代で一番先端的なことを走っている人を集めるだけで、かなりおもしろい新しい提言ができるでしょう。私はできなかったけれど

も、そういうこともできると思いますし、何をやっちゃいけない、こうしなきゃいけないということはないと思っています。私も。何でもありで、肝心なことは足を引っ張らない。本屋に売れるものをつくるのもいいし、一〇〇〇部買い上げもあっていいじゃないですか。

井上 一〇〇〇部買い上げはあんまりやと思います。

鈴木 今度の『Japan To-day』研究』も一〇〇〇部刷りましたよ。外からお金をとってやっていて、海外に出す部数として、それくらい刷るべきだと判断した。いつもいいですが、「買いあげ」ではないですよ。こちらは海外頒布分の制作費を出すということですよ。

私の言いたいことは、思いつきでもいいから、あるいは笠谷さんみたいな動き方もあるでしょう。私自身のは大体研究運動スタイル、ムーブメントをつくってゆく。問題提起をして動かしていくというのが好きなんですけども、「おまえ、これはだめだ」ということを言っている絶対だめだと思います。何でもありでいいから、多彩化していかなきゃだめだ。大学とか、ほかの機関でもやっているわけですから、そこではできないことをやればいいわけです。差異化して。手堅いのもいいし、小人数で小さい専門のがあってもいいし、ばかどかいのがあってもいい。あれはいかん、これはいかんと言わない。もちろん、外に対するアカウントビリティは必要ですが、それが私は日文研の精神でいいんじゃないか。

そもそも、チームリサーチは、理科系が始めたわけですよ。二〇世紀にはいつて、一〇年ぐらいから。これはわかりやすいくらいと、土建屋の親方の方式です。そうでないやり方でそれなりの成果を出す共同研究って外国人はわからないでしょう。チームリサーチといたら、理科系の方式や、桑原方式しか思い浮かばないでしょう。親分が外部から金をとってきて、役割を割りあてて、成果を出す、それ以外だったらピラミッドの吉村作治とか、ああいうのがチーム

リサーチだと思っているわけでしょう。だけど、そうじゃないことが人文研から始まっている、いろんなところで手探りしている。我々はいつも新しい方法の開発みたいなことを、「あつ、ああやったら何かできるんだ」みたいなことを見せていくのが使命だと思っています。その創意工夫を何でもありで行きましようと言っているのですが。

倉本 ありがとうございます。

三五年史の座談会があったら、私は鈴木先生の言葉を長老としてしゃべりたいと思います。じゃあ、戸部先生、お願いします。

戸部 私は一回しかできないし、一回だけやればいいので、あまり考えたことはないのですが、ただ一回しかやれない者からしてみますと、今まで多くの方々が言われたこととの関連で言いますと、一〇年やる方はちょっと長期的に考えられたほうがいいような感じがいたしますね。最初の自分の計画からおそらく変わっていくだろうとは思いますが、もし三回共同研究ができるとすれば、その関連性をどこかで最初から考えておかれたほうがいいという感じがいたします。

もう一つは、学際性をどうやって担保するかということだろうと思うのですが、どうしても三年間でまとめる、あるいは一回しかできなくてまとめるとなると、まとまりやすいメンバーしかなかか選べませんので、学際性を担保するという意味でも、ある程度の時間が必要なのではないかなという気がいたします。

倉本 ありがとうございます。

それでは最後に、猪木所長のほうから、過去のことも踏まえまして、提言やら問題点やら、すべてをお話しになってください。

猪木 いやいや、難しい仕事ですね。まず簡単に印象を二つ。皆さんよくしゃべりますね。私の分野では、短くしゃべればしゃべるほど評価されるんですけども。いや、ほんとにいろいろな情報もたくさんいただきました。

それともう一つは、さっきの笠谷さんの話、私は記憶がないと申し上げただけで、笠谷さんの話を聞いていて、うっすら思い出しました。朗々と長くしゃべる人がいたと。ただ、笠谷さん、これはちょっと失礼なことを言ったかもしれないけど、笠谷さんがあの仮説検証（検証）的云々ともう一つタイプを大きくお分けになった。あれは分かりやすい分類だと思います。私が参加した村上泰亮さんと飯田経夫さん、お二人とも亡くなりましたけど、ちょうど両極端のまさにおっしゃるようなタイプに分けられると思います。ついでにこれからのパースペクティブに関係して二、三申し上げると、スターリン型というのはちょっと言葉が強いと思うんだけど、その人にちょっと反抗したいなというようなら何かの主張を持った人がリーダーになった場合は、ある程度やりやすいでしょうね。例えば村上さんはそうだったんですよ。村上さんは決して笑わない、だからみんな若い人が顔色を見ながら発言するというような雰囲気があった。

笠谷 冗談が言いにくい雰囲気ね。

猪木 それに対して飯田さんは、割に自由に、しかし特に成果物を目指すというわけでもなかったと思います。村上さんは体を悪くされて、残念ながら最後までたどり着くことができなかったのですけど。

このお二人が、おもしろいことに、研究会のスタイルじゃなくて主張も違ったんですね。日本の企業文化とか、日本の雇用慣行とか、日本人の経済生活、勤労生活に関して、企業

活動に関して、村上さんは言ってみれば日本特殊論に割に傾いておられたし、飯田さんはまた逆だったんです。日本は何も特殊じゃない、慣行面を機能的に見るとどこの世界に行っても同じだという、そういう主張の方でした。

ですから、将来的には、スタイル、やり方、まとめ方を区別して議論して、やり方に関して飯田型があり村上型があってもいいと思うんですけども、まとめ方に関しては共同研究というものが一つのコーナーに来ていると思います。私の個人的な感想ですけど、ヒューマニティーズで共同論文というのは大体あまり書かないでしょう。理系は今、二桁ぐらいのオーダーが名前を連ねて一つの仮説検定（検証）的な論文を書く。経済学はその中間で、大体最近の実証研究は三、四人の共同名の論文が増えてきて、一人というのはほとんどないですね。理論研究も単独論文は減ってきていますね。

それに対して人文学は少し違う。共同研究がまとめ方という段階で、つまり、議論し討論し、先生とか権威主義的なことを言う人に刃向かいながら議論をするという討論の場と、最終的にまとめるといふ段階で、ホッチキスで綴じるといふ形にならざるを得ない。ヒューマニティーズは個人・オーサー自身の個性を奪い去ることは、私はできないような感じがします。それが第一点、つまり、やり方とまとめ方を区別して議論したほうがいいということ。

もう一つは、若い人を巻き込んでいく教育機能を持つべきだと。そういう意味で、私は桑原先生の研究会は全く知りませんが、スターリン的であれば、これは教育機能を持ちますよね。さっきの顔色を見ながらやらざるを得ないという雰囲気は、やっぱり学問にあるわけですね。そして権威に対する反抗みたいなもの。だから、そういう意味で若い人を招いて、たくさん巻き込んで、そしていろいろな仕事をしてきた先生の研究の姿勢はこうだとか、研究の丁

寧ささこうだとか、研究をしていく上での倫理としてどういうふうなことを自分に課しているかなんてことを何となく吸い取っていく。

最後に一点だけですけれども、飯田先生から誘われたとき、一種のサロンの、ディレクタンティズム的、耳学問をさせていただく機会として、勉強になりました、それで終われば自分の分野へと散っていく、というようなイメージだったんです。実際、私自身、共同研究会を二つやって、知識創成的な要素というのはあるなあとというふうに感じますね。これは予感なんですけれども、それがどれほど大きなものか小さなものかは別にして。だから、学問が細分化されればされるほど、共通語を失わないためにも、みんなバベルの塔になってしまわないように。共通の言語を持つためにも、何かこういう共同研究のポジティブなプラスの役割というのを、われわれが証明する義務もあるんじゃないかな。

私も昔は共同研究会に対してちょっと否定的だったんですけどね、特にヒューマニティーズに関しては。だけど、まとめ方はちょっと置いておいて、議論の場としての役割は無視できないということ、私のまとめといたします。

倉本 うまくまとめたいで、おかげさまで座談会も何となくまとまったような形にしていたきました。

ほかにフロアのほうから、これは言っておかなければいけないというご意見がございましたら、マイクを回します。よろしいでしょうか。

笠谷 ちょっと、どうしても一つだけ、これだけ指摘したいのが一つあるので、ちょっとだけ言わせてもらえますでしょうか。

倉本 まあ、どうぞ。

笠谷 これは現在、実務的な話ですが、共同研究が非常にやりづらくなっているんです。我々、共同研究は通常金土型でやるというのが一つのスタンダードで、土曜日だけの方もおられるのですが、金土二日型、隔月金土開催型が一つのスタンダードだったので、今、金曜日の開催が非常に難しくなっています。

これはどういうことかといいますと、各大学の締めつけが非常に厳しくなって、金曜日を休講にして日文研の共同研究会に参加するということは非常にできにくくなっている。要するに、半学期、一五回ですか、そのノルマが非常に強化されていて、それが削れない。当然、会議等もある。したがって、金曜日の欠席が非常に顕著になってきている。したがって、我々はそれを変えざるを得なくなっている。倉本さんもやられています、つまり土日型に変更するようになってきた。これはどうしようもなく、私も次の四月からのやつを、これまでの趣旨を変えて、土日型に変えざるを得なくなっている。本当は望ましくないけれども、その形になる。

ただ、これがどういうふうな展開になるのか。これをネガティブにとられるべきなのか。それとも、そこまでしても土日であっても研究会に来るんだという熱心なやつが、逆にそのことによって生まれることになるというふうにポジティブにとらえるのか。これはちょっとやってみなきゃわからないのですが、一つの節目にあることだけをちょっと指摘したいということがあります。

倉本 もう私立大学の教員は土曜日も締めつけが厳しくて来られないと思います。

という話はさておきまして、それでは二回目の座談会をこれで終わらせていただきたいと思えます。まだまだお話し足りない方、いらっしやると思いますが、あちらに瀧井先生のご尽力

で一席設けていただいておりますので、その場でまたお話しただきたいと思えます。
先生方、どうもありがとうございます。フロアの皆さんもありがとうございます。

パネリスト

稲賀繁美 (国際日本文化研究センター教授)

井上章一 (国際日本文化研究センター教授)

笠谷和比古 (国際日本文化研究センター教授)

鈴木貞美 (国際日本文化研究センター教授)

戸部良一 (国際日本文化研究センター教授)

早川聞多 (国際日本文化研究センター教授)

マルクス・リュッターマン (国際日本文化研究センター准教授)

司会

倉本一宏 (国際日本文化研究センター教授)

フロアからの発言者

小松和彦 (国際日本文化研究センター教授)

白幡洋三郎 (国際日本文化研究センター教授)

講評

猪木武徳 (国際日本文化研究センター所長)